



小児がんで19年前に亡くなった長女景子さんの闘病生活を描いた絵本をこの夏、出版した。題名は「6さいのおよめさん」。花嫁に憧れた娘に、妻淳子さん(53)がウエディングドレスを着せて納棺した場面からとった。

子どもが希望を感じられるよう文章の表現や構成には気を配った。絵は優しい筆遣いの画家城井

文さん(46)に依頼した。ただ、娘の姿は「ありのまま」を描いた。抗がん剤で抜けた毛髪、臨終、そして小さな骨箱……。

自宅のある愛知県豊田市を拠点に全国の学校や地域で、娘の短い生涯を語る講演を重ねてきた。現代っ子は、身近な死に接する機会が少なくと痛感する。だから、出版社から「子どもでなく、植物や動物の話に置き換えてほしい」と言われても譲らなかつた。

子ども向けとして例のない絵本が出版できたのは、東日本大震災を経たから。「死と向き合うなかで本当に大切なことは何か、どう生きるか、をみんなが問いかける時代になった」と感じている。

「いのちの授業」と名付けられた講演の聴衆は、約10年で延べ17万人を超えた。仲間を自殺で失った学校や職場に赴き、死にたいと漏らす中高生にも会った。「どんなことがあっても、お父さん、お母さんより、絶対早く死んではいけない」。聴き手には、絵本にも取めたこの言葉を必ず伝える。